



第438号 「がんばろう、日本！」 国民協議会 機関紙

発行所「がんばろう、日本！」 国民協議会 発行人 戸田政康 編集人 石津美知子 http://www.ganbarou-nippon.ne.jp (東京事務所) 東京都千代田区九段北4-3-16 サンライン第14ビル6階 〒102-0073 TEL 03(5215)1330 FAX 03(5215)1333 (発行所) 東京都東大和市南南街2-17-16 パピルス会館 〒207-0014 TEL 042(566)2950(代) FAX 042(566)2949

「切れ目のない民主主義」を鍛えよう

変容する国際環境、深化する立憲民主主義の当事者性

立憲民主主義の当事者性 主体基盤が形づくられつつある

安保法が参議院本会議で可決・成立した一ヶ月後の10月19日夕刻、国会前には主催者発表で9500人の市民が集まり、「戦争法案廃止」「安倍内閣退陣」の声をあげた。今後も毎月19日に抗議行動が続けられる。法案成立後も各地のデモや集会は続いているし、学者の会やSEALDs、高校生の運動も続いている。「切れ目のない民主主義」という民意、立憲民主主義の基盤が形づくられつつある。

正しいんです』って言っちゃう首相に対して、おかしくないですか？』って言うていくことは、法案そのものとはまた別で、問われているのはずいっと主権者としてのわれわれなんですよね」(SEALDs 民主主義ってこれだ！・大月書店)

「民主主義ってこれだ」というコールに込められているのは、議会制民主主義の機能不全に対するあきらめや失望ではなく、「私たちの民主主義をもう一度、ここから始めよう」という連帯だ。投票箱に収まらない民意、選挙に限定されない政治参加、それらが行動的に可視化されてきた。法案成立はひとつの区切りではあるが、私たちの民主主義は切れ目なく続いていく。主権者になることを止めないかぎりの。

「――安保法案が成立した今、政府や国民はこの問題に向き合っていくべきでしょうか。(山元) まず、基本的なことですが『民主主義って何なんだらう』というのを問いただす必要があります。多元的な意思決

定システムがなければなりません。例えて言うと、会社のコーポレートガバナンスでも同じではないでしょうか。トップの暴走を止められないと会社自体が潰れてしまう、ということですよ。他方、『決められる政治』が求められるのも全くおかしいことではありません。ルールによって守らうとする『法』と変化していく状況に対応しようとする『政治』のそれぞれの領分を踏まえた上で、両者の『よき関係を再構築していく』か、考えなければいけない。

具体的には、さきほど言った憲法裁判所創設の可能性(政治に法を守る仕組みのひとつとして)引用者)を考

えるのも一つですね。もちろん、選挙以外の場で示される国民の世論も重要です。『デモにきているのはわずか数万人しかない』というのは、非常に見くびった物言いだと思います。手間隙をかけてデモまで行った人が数万人いたのなら、同じように思っている人が、その裏に数百倍、数千倍いると考えるべきでしょう。メディアの独立性を守るのも重要です。政権の顔色を窺わないと報道ができないとか、報道番組が作れないとかいったことが起こってはいけま

せん。よもやないとは思いますが、もちろん選挙妨害などがあったもならない。

『中略』そして、1回の選挙で終わりではありません。1回で片が付くという考えは、シンブルで人々の心に入りやすいところがあります。しかし、以前に私は『選挙独裁』という言い方をしたことがあります。政府が「一度の選挙で勝ったら全部終わり」という考え方を採るのは、非常に短慮で不適切です。そうやって、議論を深めながら何度も選挙が行われる中で、国民の多くが『反対だ』と言っているのであれば新安保法は廃止される。逆に、もしも政府の主張に対する国民の支持が安定的に獲得されれば、新たな憲法解釈が入れられていく。そのようなプロセスを積み重ねていくことが、まさに健全な民主主義の実践であると言えらるでしょう」(山元一・慶應大学教授、ダイヤモンドオンライン10/15)

こうしたプロセスの一步として、来年の参院選ではまず、政府与党の暴走をブロックできる参院の議席(与党過半数割れ)を目指すことが必要だ。そのためには野党の選挙協力が不可欠だが、それは何よりも「切れ目

と

ら

(発行所)
東京都東大和市南橋2-17-16
パピルス会館 〒207-0014
TEL 042(566)2950(代)
FAX 042(566)2949
〈郵便振替〉00160-9-77459
「がんばろう、日本!」国民協議会
ゆうちょ銀行 019店 当座0077459

1部 300円
定期購読 半年2,000円
一年3,500円

今号の紙面

インタビュー
1-3面 立憲主義を取り戻すために
福山西郎・参院議員
3-5面 住んでよかったまちをめざして
尾崎保夫・東大和市長
5-6面 地域市民発議をもっと増やそう
原亮弘・おひさま進歩社長
6-16面 シンポジウム
安全保障環境の変化を「凡庸の善」で考える

のない民主主義」の民意に添える、という土台の上ではじめて成り立つ。代議制民主主義とは私たちの民意を議院においていかに再現させるか、ということだ。「言いつと聞かせる」のは私たちであって、それにどう答えるかが政党には問われている。

依存と分配のユートレイによる「お任せ民主主義」、その裏返しとしての「政治不信」、そこから登場したのが安倍政権だ。低投票率と小選挙区制のマジックで、民主党政権に替わった09年総選挙よりも、自民党は得票を減らしているにもかかわらず議席数では圧勝した。

政党を自分がバッジをつけるための道具、くらいにしか考えていない根無し草の野党では、一度の選挙で勝ったら全部終

公共空間、言論空間を鍛えよう 「凡庸の善」で考え続ける

立憲民主主義の当事者性をつくりだす、主権者になるためのアリーナは、「凡庸の悪」と「凡庸の善」との言論空間でもある。「凡庸の悪」と「凡庸の善」については6面シンポジウム冒頭を参照。この言論空間―公共空間をいかに鍛え上げていくか。

「ただし現在の憲法や憲法学が支えようとするリベラル・デモクラシーあるいは立憲デモクラシーには、『公共』が『公共』として強くなりたくて弱

わり」という与党に太刀打ちは効かない。これも安倍政権のおかげではっきりした。こうした既存政党の体たらくも肚に収めたくてなお、「それにもかかわらず」(マックスウェーバー「職業としての政治」という主権者であり続ける、そのための勇気を持つ)。

路上から始まった「切れ目のない民主主義」、そして地域自治、住民自治のなから育まれている自治の力―主権者になるための、主権者であり続けるための民主主義のアリーナは、こうして目の前に広がっている。何度でも、私たちの民主主義を始める。今日に至る民主主義のための長い歴史を受け継ぎ、未来の世代とともに生きるために。

点があります。よほど頑張ったくましい公共言論を維持していかねば(引用者/凡庸の悪と凡庸の善のせめぎあいを創出していかないと)、おのずから『公共』はやせ細り、脆弱化するわけです。やはり何らかの基本的な価値を注入したり、国旗・国歌などの儀礼によって演出したりした方が『公共』は強くなり

ます(石川健治・東大教授 『世界』8月号)。
依存と分配に明け暮れたユートレイによって脆弱化した公共空

間―言論空間を、何によって維持し強くしていくのか。復古主義的な価値観やナショナリズムによってか、それとも戦後日本の自由と民主主義、平和憲法の理念という「未完のプロジェクト」(SEALDs)を受け継ぎ、次の世代に引き継いでいくことによってか。

あるいは、東京一極集中シテムにさらに地方を従属させ、地域を喪失した愛国心を高めることによってか。それとも生活領域としての地域と、そこにおける自治・コミュニティの再構築を起点に、郷土愛―国益―地球益を再構築することによってか。

安保法制に関して言えば、運用にあたっては国会承認が求められる。憲法9条の明文改正ではなく解釈変更を行った安倍政権は、安保法制の運用に際して、憲法9条の範囲内にあることを、国民に向かってこれまで以上に厳格に証明し続けなければならぬし、それを厳しく要求する民意を形成し続けなければならぬ。

立憲民主主義における法と政治の緊張関係(山元慶心大学教授 前出)という点からいえば、軍事、防衛に関わる問題では、より厳格な法の統制が求められることは、過去の「国策の誤り」の教訓からも明らかだ。同時に、政府の暴走とともに世論(セロソンの暴走をコントロールする輿論、それをつくりだす言論空間を鍛えることが不可欠。安保法制の運用をめぐる議論をこつした新しい土俵―立憲民主主義の基盤のうえに乗せることができるか。10月18日のシンポジウム(6-16面)は、その試みでもある。

一方で最近「自治体や美術館、書店、大学、メディアなどで政権に批判的な言論や表現を「自粛」「自己規制」する動きが目立っている。はじめのうちは匿

名の「市民」による「クレーム」、そして抗議の電話やメールで業務に支障をきたす、面倒なことに巻き込まれたくない」と。

戦前も世論が翼賛体制に動員されていくプロセスでは、政府に批判的な新聞は不買運動を組織され、好戦的な新聞は部数を伸ばすということがあったという。自民党からはメディアに対して、「放送法違反だ」とか「スポンサーに圧力をかけて潰してしまえ」という脅しが一度ならず、たびたび飛び出しているのは周知のとおり。

だがこつした事態を政権の圧力とだけとらえるのは一面的であり、大事なことを見落とすことになる。特定のマイノリティを名指して「殺せ」と叫ぶデモ、金目当てのヘイト本が書店に並ぶ状況を、「言論の自由」と言うのか否か。これは私たち自身が、自分たちの社会の基本的価値をどこに定め、維持していくのかという問題でもある。

憲法12条の条文はこうだ。この憲法が国民に保障する自由及び権利は、国民の不断の努力によって、これを保持しなければならない。又、国民は、これを濫用してはならないのであって、常に公共の福祉のためにこれを利用する責任を負う。

自由や基本的人権、個の尊厳、そうした普遍的価値の上に言論や表現の自由を維持するのか、こつした普遍的価値を侵害し、毀損するものも「言論の自由」とするのか。言論の自由は普遍的価値であると同時に、その社会における歴史的文脈―いかにして戦いつられ、確立されてきたのか―を共有することで、強化され受け継がれる。

依存と分配のユートレイ社会では、「言論の自由」は好き勝手なことをワーワー言い合つことになってしまった。これをどう

り方というのは、結果的には暴力の総量
をあまり減らさなかったかもしれないの
で、そういう観点は必要になるのではな
いか。

二つ目はやっぱり核の問題は大きく
て、核の不拡散はなかなか難しいかもし
れませんが、核を使わないということは
ボトムラインとして、安全保障問題の最
大の要請であると思います。仮に三回目
の核兵器使用ということになると、中東
であれ、アジアであれ、インド、パキス
タンであれ、基本的な前提、根底が変わっ
てしまう可能性があるで、そこは避け
ると。

三つ目が長期のビジョンに関わること
です。冒頭に東アジアと中東では、だい
ぶ安全保障環境が違うというお話をしま
した。東アジアでは国民国家という枠組
みが強すぎるので、どうこれを弱めてい
くか。なくすことはできないし、好ま
しくもありませんが、例えば尖閣とか竹
島とかは、国民国家の枠組みでやってる
限り解決つかないですね。説得してどち
らかが納得するという話はありませんの
で。解決というのは「誰も気にしなくな
る」ということだと思っんです。

今は無理ですが、三、四十年先、もう
少しかかるかもしれないですが、そういう
時代が来ることを期待する。それが東ア
ジアの課題だと思います。ウイグル問題
なんかも、中国が国民国家だという形で
がんばっている限り、解決しない。連邦
制なのかどうかは分かりませんが、もう
少し何かいい仕組みを考えてもらわない
と、中国は困るだろうと思います。これ
も三、四十年先の課題かもしれません。

中東は国民国家でいけるのか、全然分
かりませんが、いろいろなものを組み合
わせた国民国家的な秩序と、それを超え
るような脱国家的な、宗教的なものを組
み合わせたような秩序を、もう少し整え
てもらわないと困るのは間違いない。そ
ういうものは、やっぱり三十年ぐらいは
かかるんじゃないでしょうか。それまで
中東は正直大変だと思えますが。

大野さんの話からすると、石油はこれ
からもしばらくは安いだらうと。それか

ら、中東全体を支配するような大きな国
は出てこないだろうということで、非常
にシニカルに言えば、中東の問題は世界
を揺るがすほどの大問題にしない程度に
関わっておく、ということがいいのかな
という気がします。もちろん放っておく
わけにはいきませんが、その時々にか
にしてバイオレンスの量を減らすかとい
う選択を繰り返して行って、その過程か
ら何らかの安定した秩序が出てくるのを
待つと。

そういう意味では、日本の中東への関
わり方としては、軍事力に頼った関わり
方はあまり賢明ではないのではないかと。
アメリカがやっているように、空爆をし
てみても武器援助をしてみても、うまい
ことはいかないですね。

司会 ありがとうございます。何かこ
れだという結論が出る、ということでは
ありませんが、主権者として考え続ける
ということ、安保法制の運用の中身に
関しても今後、大いに議論していきたい
と思います。

(10月18日。タイトル、小見出しとも文責
は編集部)

(「中東は、長い『帝国崩壊』の過程にあ
る」という視点については、「日本再生」
388号、末近浩太・立命館大学教授イン
タビューも参照。)

戸田代表 集約コメント



一面から続く

鍛えていくのが。

時代の大きな転換(グローバル
資本主義など)はえてして、
社会にゆがみや生き苦しさを生
じさせる。そのゆがみや生き苦
しさをもたらすものを「外部」
に求めない思想や行動の探求か
ら、私たちの立憲民主主義を鍛
えよう。「奴らを通すな」とい
う反ファシズムのスローガンは
今、曲がりなりにも維持されて
きた自由で民主的な社会を、未
来の世代によりよい形で受け継
いでいくために、掲げられるべ
きだらう。

不断的努力で考え続ける「凡
庸の善と凡庸の悪」との言論空間
を、いまの場でもつくりだし、
鍛え上げていこう。